東南アジア研究　23巻3号　1985年12月

現地通信

西ジャワ農村再訪記

五十嵐　忠孝*

ジャカルタ連絡事務所の新しいお手伝いさんは，毎日必ず大衆紙『ポス・コタ』に目を通す。いろいろ確かめてみたのであるが，何とかいう歌手が入院しただの，何とかいう俳優が奥さんを替えただのという記事は，ちゃんと読んでいる。インドネシアといっても西ジャワ州の一農村での生活体験しかなかった私には，中央ジャワ州グヌン・キドル地方の農村出身というこの新しいお手伝いさんが，ずいぶんと“インテリ”にみえてしまった。というのも，私の知る限り，一般の農民は文字が読める者でも，およそ活字には何の興味も示さないのがふつうだからである。

ある時，必要があってこのお手伝いさんに生年月日を尋ねたのであるが，「そんなこと知らないわ！」と大変そっけない。確かなことは2年前に小学校を卒業したことだけである。やはりそうか……と思いつつ，今度は年齢を尋ねると，17歳だという。生年月日がわからないのに，年齢だけはまことしやかに答える。

さて，ジャカルタ連絡事務所の前任者，土屋健治助教授との引継ぎ事務が終ってまもなくのさる4月，私は5年ほど以前にごく短期間滞在したことのある西ジャワ州のある漁村を再訪することができた。私が居候していたのはRK（エルカー）（部落長）の家で，当時小学校5年生の可愛い末娘が何やかやと世話をやいてくれたことを，昨日のように思い出すことができる。5年ぶりにこの漁村を訪れた私を，最初にそれと気がついて手をふってくれたのもこの末娘であるが，何と生後1年の初子を抱きながら私の再訪を歓迎してくれたのである。私は念のためこの末娘の年齢を尋ねてみた。「20歳になりました」と母親が答える。5年前に小学校の5年生だった女の子が……。

漁村の再訪と前後して，以前比較的長期に滞在したことのある農村へも，久しぶりに出かけることができた。もう何度目かの再訪である。この村の場合，ほとんどの村人について名前と顔とおよその年齢を思い出すことができる。そして，あの娘もそろそろ結婚するころだ，あるいはもう結婚しているかもしれないと予測して，それがどのくらい当たるかはずれるかを確かめる楽しみがある。ある娘がもうそろそろ結婚しそうだと予測することは，実は大変簡単である。多くの娘は初潮を迎えるとまもなく，あるいは遅くとも2～3年以内に1回目の結婚をするからである。もちろん，しばしば私の予測ははずれる。まだ結婚していないだろうと思いきや，家の中からみなれない若い男が出てきて，「これが新しい婿です」とその娘の親に紹介されたりすることもままある。この村では，比較的最近結婚した婦人でも，3分の1以上の者が結婚当時まだ初潮を迎えていなかったというほどの早婚が依然行われているのである。

今回，この農村を再訪してびっくりしたことのひとつは，大変人望の厚い村長が辞めさせられていたことである。この“村長”は1980年に圧倒的多数の票を得て選ばれたばかりで，年齢は私とほぼ同じである。辞めさせられたのは，公務員の重婚禁止を定めたPP 10（ペーペースプルフ）に触れたからだという。この“村長”と私は親しい仲なので，その内幕を詳しく聞くことができたのであるが，別れた先妻が哀れで，後妻との婚姻関係をそのままに，よりを戻したまでだという。無論この“村長”自身悪いことをしたとは考えておらず，私が知り得た限り，この“村長”に対する村人の信望に変りはない。

1974年には婚姻の下限年齢が女16歳，男19歳と定められ，1983年には公務員の重婚禁止が定められるなど，婚姻の実態を西欧近代国家並に近づけようとする政策が採られる一方で，村人の考え方には少しの変化も生じていないように思えてならない。（**京都大学東南アジア研究センター助教授**）

* Tadataka Igarashi, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University